

La Harmonio

N-ro 242

Tutlanda Organo de Rondo Harmonia
Eldonejo : Rondo Harmonia

<< 目次 >>

☆ 会費変更のお知らせ		2～3 頁
☆ 第100回世界エスペラント大会の感想		4～28 頁
	山口 百合子 (横浜)、柴山 紀子 (横浜)、山本 美郷 (相模原) 広高 正昭 (柳川)、石部 敦子 (広島)、田平 正子 (京都)	
☆ エスペラントと機械翻訳	長瀬 久明 (兵庫)	29～30 頁
☆ OAZOのこと	石坂 元 (千葉)	31 頁
☆ 広島RH同窓会	福井 政春 (岡山)	32 頁

第 100 回世界エスペラント大会

7月26日(土)～8月1日(土)にフランスのリール市で開催され、世界80カ国から2,698人が参加しました。第72回大会(1987年、エスペラント発表100周年、ワルシャワ)の5,946人には及びませんが、参加国数は大会史上最多の80カ国。アジアやアフリカへのエスペラントの普及が感じられます。

日本からは171人が参加。国別参加者では、フランス、ドイツに次ぐ3番目でした。

RH会員10人が参加。6人の方々から世界大会について寄稿していただきました。

(4頁参照)



大会エンブレム

会費変更のお知らせ

事務担当 森川和徳

下記のとおり、会誌発行回数の減少に伴い、維持会費の変更を実施いたします。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

1. 背景

2008年～2013年はLa Harmonio誌を年4回発行してきましたが、2014年は2回、2015年は本号を含め2回となり、2016年以降も同様な状況となります。

発行回数減少の理由は、事務担当と原稿の集まり具合です。例えば、La Harmonioのカラー印刷は事務担当の自宅プリンターを一日がかりで動かすことで実現しており、大きな負担となっています。活動状況を反映して、La Harmonioへの原稿の集まりもよくありません。

このような状況ですので、La Harmonioの発行を年1回(または2回)に減らします。それに伴い、維持会費を半額にします。

皆さまのご理解をお願いいたします。

2. 変更内容

項目	現行	変更後
La Harmonio 発行回数	年4回	年1回または2回
La Harmonio 配布先	・年3回は会費納入者のみ、印刷版はカラー印刷 ・年1回同窓会員(約300人)全員にモノクロ印刷版を郵送	同窓会員(約300人)全員にモノクロ印刷版を郵送
RH維持会費 支払いの意義	・RHを維持していくこと ・RH組織委員選挙の選挙権	(変更なし)
RH維持会費の金額(年)	維持会費(LH電子版) 1,200円 維持会費(LH印刷物) 2,400円 家族会費 600円	維持会費 600円 家族会費 300円

3. 実施時期

2016年度（1月～12月）より実施します。

4. 先払いされた会費の扱い

個人別に清算します。例えば、2016年～2017年、それぞれ1200円、計2400円支払い済みの場合、2016年～2019年の4年分の会費として取り扱います。ご要望があれば、会費を返納します。

詳細は、2016年始めに発行される本誌243号とともに、会費納入書をお送りします。

5. 2016年予算案

会費が安くなることで、会費納入者数が100人を超えることを期待しています。

赤字の場合は、これまでの余剰金で補てんします。

		会費(円)	人	(円)
収入	維持会費	600	100	60,000
	家族会費(注)	300	10	3,000
	計			63,000
支出	La Harmonio 発行費用 (1号分)			38,000
	インターネット・ドメイン維持 (esperanto.jp)			15,000
	関西大会・RH主催分科会費用			5,000
	事務経費 (振替費用負担など)			5,000
	計			63,000
差し引き				0

注) 維持会員の家族が対象。ご夫婦ともRH会員の場合、一人は維持会費600円、もう一人は家族会費300円で、合計900円です。

La 100-a Universala Kongreso de Esperanto (UK)

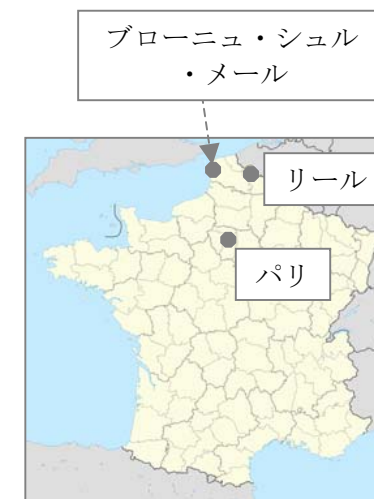
第100回世界エスペラント大会

RH会員10人が参加。6人の方々から世界大会について寄稿していただきました。掲載は、原稿を受け取った順番になっています。

名前 (敬称略)	言語	タイトル	ページ
山口 百合子 (横浜)	日本語	第100回世界エスペラント大会いろいろ	5～10
柴山 紀子 (横浜)	日本語	2015年リールUKの感想	11～14
山本 美郷 (相模原)	Esperanto	Bulonjo-ĉe-Mar, la urbo de la 1-a UK	15～17
広高 正昭 (柳川)	Esperanto	La 100a UK kaj Bulonjo-ĉe-Mar	18～21
石部 敦子 (広島)	日本語	電子機器とUK	22～25
田平 正子 (京都)	Esperanto	En kiuj programeroj mi ĉeestis en Lilla UK?	26～28

第1回世界大会は1905年に Bulonjo-ĉe-Mar (ブローニュ・シュル・メール) で開催されました。ブローニュ・シュル・メールには数千規模の大会を開催できる施設がないため、第100回大会は100km離れたリールで開催されることになりました。

第100回大会期間中にブローニュ・シュル・メールを訪れる遠足が行われました。山本さんと広高さんがその経験を書かれています。



第 100 回世界エスぺラント大会いろいろ

山口 百合子（横浜）

リールに到着

まず、フランスのシャルルドゴール空港からTGVに乗るのにエスカレーターが動かなくて大きなスーツケースを持ってみんなで階段を降りるというフランス洗礼を受けてびっくり。添乗員さん曰く、フランスでは故障してもなかなか修理しないのが普通とか。そういえば、20年位前、初めてフランスのグレジオンでのエスぺラント合宿に参加した時にも、電話やトイレが壊れているのが普通と聞いていたけど、未だに！

日本は猛暑だと言うのに、リールの寒い事！半袖不要。ジャケットが手放せません。おまけに朝晴れていても、突然雨が降るので傘も手放せません。でも、でもリールの街並みは絵に描いたように素敵です。そしてこの街の人達みんながエスぺランティストかと思う程行きかう人々は大会参加名札を首からぶら下げて挨拶します。サルートン！

大会受付にて

リール市内のエスぺラント世界大会（UK）会場まで徒歩10分位のibisホテルが宿泊所。前ちゃん（学生時代からのつきあい）と私、塩さんと睦さんの2人ずつの部屋。会場に行って受付をしようとして、デニーザの妹イザベラが我々を見つけてくれて感激の再会。3年前に地中海エスぺラントセミナー（ME S）で会って以来。デニーザは受付当番中。自分の受付を済ませてから、参加申し込みをされていてキャンセルした杉山さんの大会グッズがもらえるか聞くため受付に行って並んでいると、ロシア人の女性が昔文通をしていた大阪に住む女性を探してほしいと。名前を聞きましたが、今は結婚して住所も変わっていると思うし、難しいと思うけど、努力してみると答えました。彼女の大会ナンバーをメモ。受付の人が欠席者のグッズがもらえるか特別受付に行って聞くように言うので、別の場所で尋ねると、本部の人に聞いてくれて、結局ダメだと。後でわかったことですが、大会グッズの中にはいろんなプログラムの参加チケットが入っていて、不審な人が会場に入って来ないように、かなり厳重な警戒がありました。外部の人にチケットがわたるのを警戒

されたのでしょうか。二階へ上がる階段下に警備の人達がいつもいて、大会参加者が名札を下げているかどうかをチェックしていました。

デニーザの受付当番の休憩中に二階の食事処で再会。ME Sの会場名を書いた友人作成の袋をデニーザとイザベラにあげて喜ばれました。彼女たちも毎年ME Sに参加する常連です。

睦さんと塩さんは初海外UK参加なので大会初参加者の説明会に参加のため別行動。私は疲れすぎ予防のため夜のプログラムには参加しませんでした。前ちゃんはさまざまの活動案内を見に行きました。

開会式にて

7月26日（日）の開会式の日、参加者が多いため、入場チケットに書かれた3つの部屋に分散して、ザメンホフの部屋以外は画面を見ながらの式で、私もラペーナの部屋で大画面を見ながらでした。豆粒のような実際より、良く見えて良かったです。座席からかつてのエスぺラント子連れ会のメンバー大さんと竹さんが階段を上がって来るのが見えました。着席していた外国人とハグし合って感激の対面をしているのが見えました。彼女たちは知り合った多くの外国のエスぺランティスト達と交流が続いています。開会式を待っていると、前の方に座っていた外国人の人が振り向いて手を振っています。横の男性に合図をしているのかと思って教えてあげようとしたのですが、私に手を振っているような。。思い当たるとしたら、数年前、我が家にクロードと宿泊して以来交流のあるブリジット！ブリジットでした。大さんとハグしていたのはブリジットでした。

ブルージュにて

7月27日（月）、全日遠足の日。ベルギーのブルージュという世界遺産の街に行きました。デニーザにも美しい街だからと勧められていました。バスで隣に座ったのはブラジルの青年でエスぺラントがかなり達者でしたが、3年前に始めただけだそうです。ブラジルでは無料でエスぺラントが習える機会が多くて、沢山の人が学んでいるけど、海外に行くにはお金がかかるので難しいと言っていました。世界遺産の街を4グループに分かれて散策しました。案内人（*ôcïcërono*）の話では、この街を好きな敵が爆撃しないようにと決めて守られた街だそうです。古い街

並みが残っています。運河の街でもあって、かつて舟に魚を積んで街に売りに来ていたそうです。ボートに分散して乗って川から眺めた街も素敵でした。白鳥や鴨が沢山いて、ボートが波しぶきをあげて近づいても逃げなくて、さすが観光地の鳥です。香辛料の強い昼食後、自由にバスまで戻るように案内人に言われましたが、絶対戻れない自信があった我々は個人的に買い物をする予定の *cicerono* について回りました。その間、いろいろ話していて、彼女が4、5年前にドイツのPSIで会ったアレックスのお連れ合いだとわかりました。そしてマンフレッドの知人でもありました。マンフレッドが最近亡くなったと知って驚いていました。彼女がイヤリングを買う時、百合子これはどうだろう？と何回か私の意見を聞いてくれて嬉しかった。彼女のおかげで無事バスまで戻れました。帰りのバスの隣の席はドイツの男性でした。ドイツでは日本の原発事故の後すぐ首相が原発電力を廃止の方向にかじ取りをしたのに、日本の総理は海外に原発を売ったり国内では再稼働させようとしていて、情けないという話や、ねこの手のチラシを渡すと関心を持って話が発展したり、長いバス時間も彼とずっと話していたので退屈しませんでした。



筆者は
左から3人目

大会会場前にて

大会会場前に見た事がある若い女性が立っていました。もしやPSI（ドイツでのエスペラント国際イベント）で会った少女ではないかと聞いてみるとそうでした。随分美しい女性に成長しておられました。彼女はフィンランド人でイタリア人のラウラという少女とエスペラントを通じて知り合った仲よしだと、ラウラのお父さんマウロ（3年前死亡）から聞いていました。この日もラウラを待っているのだとのことでした。互いの国の言語が話せなくてもエスペラントで仲よしが続いているのです。

半日遠足にて

半日遠足で大浴場のあるミュージアムに行きました。ずっと一人である女性に話しかけると、台湾からの人で、レザの生徒だと言って、レザの活動がわかる写真入りの資料をくれました。レザは日本に住んでいたことがあるので日本の多くのエスペランティストが知っている存在です。子供が生まれた時画像を送ってくれましたが、今ではその子も14歳だとか。エスペラントの生徒も沢山いるようです。彼女はUK初参加でしたが、レザの名前を出すと、いろんな国の人達と話がはずんだそうです。

まずフランス語その後エスペラント通訳という長い説明にうんざりしました。隣に座っていたのは、マルチネ（ねこの手訪問経験者）が騒いでいた、「ゲルダが消えた」という映画に出演していた女優でした。彼女もうんざりした様子で座っていたので話しかけました。ペルー人の彼氏がドイツに住んでいて、UKの後、ドイツで開催される国際青年エスペラント大会（IJK）に二人で参加するのだと話してくれました。

リール市内にて

7月29日（水）は大勢が第一回エスペラント世界大会が開かれたブローニュ・チェ・マーロという町へ行く大遠足のある日なので大会会場は閉めきりで、デニーザとイザベラが我々三人を案内してくれることになりました。街中を歩いていると大会参加者名札をぶら下げた人たちが沢山いて、サルートンと声をかけあいます。路上に子連れの子浪者が何人もいました。中には乳児におっぱいをくわえさせて横には幼児を連れた子浪者もいて、心痛みました。子連れで同情を引いて物乞いをしてい

るのでしょうか。外でタバコを吸っている人達も目立ちました。室内で吸えないからだそうです。歩いて歩いて、かって札幌の五稜郭を作る時に参考にしたという建物にたどり着きましたが、軍事施設なので中には入れませんでした。他の大会参加者もたどり着いて中に入れなくてがっかりしていました。トイレに行きたくなって、隣の動物園のトイレに行くと、お昼時なので鍵がかけられていました。他にも子連れの人がトイレの前で困っていました。デニーザ達に聞くと、お昼時に閉まるトイレが多いそうです。そこからまたサルートンと声掛け合って、歩いて歩いて昼食の場所へ。デニーザ達が時々利用する素敵なレストランでご馳走してくれるといいます。睦さんは念願のミュール貝を注文。一人分しかないと言うので、私は魚料理、塩さんは肉料理を注文しました。食前に乾杯した白ビールがフルーティでおいしかったこと！よそのレストランでは冷凍したものを温めて出す例が多いけど、このレストランは注文を受けてその場で調理するそうです。ミュール貝が鉄なべに一杯出て来てびっくり。4人前じゃないかと思う程の量で、さすがの睦さんも完食できませんでした。

Paroliga kurso (会話クラス) にて

7月30日(木)になって初めて Paroliga kurso に参加できました。私は中級へ、睦さん達は初級へ。初級が親しい人ができるチャンスだと伝えました。

参加希望者が多くて入れない可能性があるというので、1時間前に行ったら一番乗りでした。それでも時間がたつにつれて大勢が押し寄せて、ついには座る席もなくなり床に座って授業を受ける人も沢山いました。講師はお馴染みの声の大きい髭の男性です。5人ずつのグループになっての授業で、中に東チモールの若者がいました。二人で参加しているそうです。確か20年以上前でしたか、紛争で苦しんでいる状況をタウン誌に仲間が書いたのを読んで、初めて国内事情を知って心痛めた記憶があります。平和でないというUK参加どころではないから、彼の参加が今の国情を表しているということかも。

ホールでギターやアコーディオン演奏を聞き、ポーランドの若者たちの歌を聞いて、夕方からまた会おうとクロードに言われていましたが、疲れたのでホテルに帰ろうとして、クロードにメッセージを掲示板に残そうとしました。大会参加者番号を聞いてなかったし、名字もわからな

いと気づいて、参加者名簿から探そうとしましたが、何分多すぎて、あきらめてホテルへ帰りました。その後睦さんが会場ですっと待っているクロードとブリジットに会って、私へのプレゼントを預かって来てくれました。クロードはレースのミニ日傘、ブリジットはカラフルな木製ネックレス。どちらもフランスらしいお土産です。お礼を伝言板に貼りました。

翌日も Paroliga kurso に参加しました。昨日ほど多くなかったせいか、今回はスペイン人の男性とフランス人の女性の3人グループでした。フランス人の女性は初心者もどきでしたが、スペイン人の男性は達者で、ねこの手のチラシを渡すと関心を持って読んでくれました。日本にまだ来たことがないと言うので、是非来てくださいと誘いました。参加者が多い場合の授業の方法として、髭の男性の教え方は参考になると思いました。

閉会式にて

8月1日(土)、閉会式の日、デニーザが朝早くから入口で私を待っていました。彼女は閉会式の途中で帰らねばならないそうで、デニーザの会場がザメンホフで私のがラペンナなので、もうお別れなのです。ハグをしてお別れしていると不覚にも涙が出て来ました。見るとデニーザも泣いていました。20年ぐらい前初めてグレジオンで会って以来、世界大会で何度か再会し、家にも呼んでくれたり、我が家にも来てくれたりの長い付き合いです。今回は私の病気の事もあって、別れに一層重みがあります。クロードもザメンホフの部屋なので、後で会おうと約束して、私はブリジットと一緒にラペンナの部屋へ。最後までいるつもりでしたが、中国人の京劇の歌のようなのが続いて満腹になり、途中から出る事にしました。ブリジットも睦さん、塩さんも一緒に。クロードにお別れが言えない事を謝ってほしいとブリジットに伝えてお別れのハグ。短い夢のような日々が終わりました。

睦さんが、いろんな国の人が対等に一堂に会している場に参加できて本当に良かったと言っているのを聞いて、良かったと思いました。塩さんは、全然話がわからなくて、すごく悔しい思いをしたから次回には是非もっとわかるようになりたいと言っていたので、それも良かったと思いました。(終)

2015 年リール UK の感想

柴山 紀子 (横浜)

今年も私たち夫婦 (柴山純一・紀子) は、JEI (日本エスペラント協会) 旅行団でリールの第 100 回世界エスペラント大会に参加した。

リールに来てから、ずっと雨模様で寒くて、長袖 2 枚の重ね着だった。いつも風が強いのでよけい寒く感じられた。夫の純一は、上着以外の長袖を一枚しか持ってきていなくて、我慢できずプランタンデパートへ買いに行くハメになった。

UK 旅行団の今回のホテルは、IBIS LILLE CENTRE GARES という三つ星ホテル。冷蔵庫もポットもフェイスタオルもない。いちばんびっくりしたのは、洗面所のコップが、ぺらぺらのプラスチックだったこと。しかも一つはヒビ入りだった。シャワーは、はじめの 2-3 日は私の手の届かないくらい高いところにセットされていた。しかしその後は低めにセットしてくれていた。

開会式

7 月 26 日 (日)、午前 10 時から開会式。会場が広いのがとれなくて、今年は 3 つの部屋に分かれて行われた。主会場の Zamenhof ではもちろん生で見られるのだが、われわれは副会場のひとつ Lapenna だったので、スクリーンで見ることになった。もう一つの副会場 Hodler のスクリーンはこれよりもっと小さくて見にくいらしい。スクリーンだと、好きどころが見られない、全体像が見られないなどの不便はあるが、要所要所が大きく映してもらえとか、いろんな角度から見られるとか (ピアノ演奏の時は俯瞰カメラもあった)、いいところも結構あった。ただ、声が一瞬遅れて聞こえるので、いっこく堂さんの芸を見ているような変な感じだった。

一日遠足

7 月 29 日 (水) の一日遠足は、ベルギーの Ieper (イーペル) という町へ戦争博物館と墓地を見に行った。ここは、第一次世界大戦時に

ドイツ軍がマスタードガス弾を初めて使用した町。従って、マスタードガスのことをイペリットというようになったそうだ。ここには、敵対した二カ国、ドイツとイギリスの塹壕が復元されていた。途中で簡易ベッドの部屋があるのだが、一つ一つがあまりに小さくて、背の高い人には窮屈だったろうと思った。



ここに一本の標識が立っていて、一つが日本を指し示していた。何かと思ったら、毒ガスが使われた世界中の都市を示しているようで、Tokyo, Japan 20.03.1995 はサリン事件の日だと知り、ショックだった。



フランスの新幹線 TGV

われわれのグループは、後遠足も含めて、パリからリール、リールからブリュッセル、ブリュッセルからパリと、3回フランスの新幹線を使った。添乗員の山口さんから、「フランスでは、指定席切符を持っていても、そこに誰か座ってるかもしれません。空いていたら座っていいことになっているからです。」と聞いていた。パリからリールの時、案の定、われわれの席にも1人若い男性が座っていた。切符を見せてもらおうと、号車がちがっていた。「あなたは向こう。」と指さして何人か言うが、頑として動こうとしない。確かに、大きな荷物を持って、2階を通過して（このときの新幹線は2階建てだった）となりの号車に行くのは大変そう。まあ、席も空いてることだし、いいよいよと言うことになった。

リールからブリュッセルの時も、われわれグループの席の真ん中を、男性がふんぞり返って占拠していた。そこへその席のKさんが来て、自分の切符を見せてここは自分の席だと主張した。相手はいくら言っても切符を見せない。Kさんのすごい剣幕に押されて相手は退散した。Kさん曰く「こんなときは主張せにやダメですよ。こっちが正しいんだから。」まったくその通り。だけど、私ら怖くてよう言わんわあ。



フランスの新幹線 TGV

閉会式

8月1日（土）、閉会式も我々はLapennaで、スクリーン越し。いつも通り順調に式次第が進み、いよいよ大会旗の引き継ぎになった。ここで、フランスのLKK（現地大会委員会）代表の男性は、泣き出すんじゃないかと思うくらい感情が高ぶっていて、でも泣かないでかなり長く感謝を述べた。次のスロバキアのLKK代表の男性も、同じくナーバスになっていて、やはりかなり長くしゃべっていた。そのうち、一緒に大会準備をしている人の中に、人生をともにするような人が現れた…などという話になり、彼女が大写しになり、彼がポケットから指輪を取り出して、ひざまずいて彼女にプロポーズ。まわりはやんやの大喝采。彼女ももちろん快諾。その場でキスをして、みんなの祝福を受けた。「これは誰にも秘密のサプライズでした」と彼は言った。しかし、スクリーンでは、彼と彼女はハートの形にトリミングされていた。カメラ技術者には知らせてあったのだろうか？



スクリーン上のハート形の画像

最後に

今回は、エスペラントのプログラムにはほとんど出席しなかった。でも、劇を2つ、映画を1つ観て、一日遠足2つ、半日遠足1つに参加。毎年会う友人にも会えたし、かの有名なブローニュ・シュル・メールにも行けたし、満足な大会だった。ただ、1週間も泊まるホテルがもう1ランク上だと、もっと快適だったのと思う。

(終)

Bulonjo-ĉe-Maró, la urbo de la 1-a UK

Yamamoto Misato (Sagamihara)

Delonge mi deziris viziti la urbon Bulonjo-ĉe-Maró, kie okazis la 1-a UK.

Mi sciis, ke oni havis planon viziti tiun urbon kiel unu el la Tuttagaj Ekskursoj dum la kongreso.

Kvankam ĝis nun mi kelkfoje partoprenis en la Universalaj Kongresoj, mi malofte ekskursis. Ĉar mi ne ŝatas veturi per buso dum longa tempo. Malgraŭ tiu malfacileco mi kuraĝe decidis ekskursi al Bulonjo-ĉe-Maró.

Je la oka kaj duono, marde, la 28-an de julio mi enbusiĝis preninte medikamenton kontraŭ veturmalsano.

Apud mi sidiĝis nekonata sinjoro. Ni prezentis nin reciproke. Laŭ lia sinprezento mi eksciis, ke li estas bulgaro kaj partoprenis en la UK en Jokohamo. Kaj mi rememoris, ke li estis unu el la salutantoj ĉe la malferma soleno kiel reprezentanto de Bulgario. Tiam li donis al iu sinjoro trofeon kaj sonorilon sur la podio. Ni gaje babilis pri multaj aferoj dum ĉirkaŭ du horoj.



bulgara sinjoro
kaj la aŭtoro (dekstra)

Dank' al li mi atingis la urbon senprobleme. Unue ni vizitis la placon apud la stacidomo, kiun Zamenhof atingis por la 1-a kongreso en 1905. Due la teatron, kie Zamenhof faris la faman paroladon. En la teatro ni spektis interesan filmon sur solena seĝo. Post la tagmanĝo ni anoj de la grupo "Malnova Urbo" promenis la ŝtonan urbon, kie troviĝis katedralo, mezepokaj fortikaĵoj kaj aliaj historiaj konstruaĵoj. Vespere ni denove enbusiĝis por reiri al la kongresejo.

La urbo Bulonjo-ĉe-Maró tre kortuŝis min, ĉar en la sama loko la antaŭuloj de Esperanto, kiuj klopodis kun Zamenhof kolektiĝis en ceremonia kostumo por festi 110-jaran datrevenon de la naskiĝo de la lingvo Esperanto.

Nun mi forte sentas, ke niaj gravaj roloj estas disvastigi Esperanton kaj restigi ĝin post 100 jaroj.



Statuo de Zamenhof



"Malnova Urbo"

Dekstra: Nuna figuro de la teatro
Monsigny, kie okazis la 1-a UK



Fotoj de la 1-a UK, eksponataj en la teatro

Mi al vi aldone prezentos alian emocietan scenon en Lillo. Hazarde mi renkontis tri virinojn, nome du antaŭulojn kaj unu samgradanon en la sama kolegio en Hiroŝimo. Antaŭ ĉirkaŭ 50 jaroj ni apartenis al la sama Esperanto-klubo. Ni kune lernis la lingvon kaj movadis por ĝi. Nun la situacio de ĉiu el ni estas diferenca, sed ni ja vivas en la sama mondo, Esperantujo!

Laste mi montros al vi foton de la Internacia Koruso, kies aktivo daŭras jam pli ol 50 jarojn. Ĉi-jare ĉirkaŭ 40 kantantoj el 18 landoj kolektiĝis en la koruso.



Internacia Koruso

<要旨>

フランスのリールで開催された第100回世界エスペラント大会に参加し、第1回大会が開かれた“ブーローニュ-シュル-メール”を訪れた。

110年前の先人達と同じ場所にいると思っただけで胸が熱くなった。

これからもエスペラントの火を絶やさないことこそ、私たちの使命だと感じた。

La 100a UK kaj Bulonjo-ĉe-Maró

HIROTAKA Masaaki (Janagaŭa)

Ĉi tiu estis mia kvina Universala Kongreso de Esperanto post tiu en Rejkjaviko, 2013. En tiutempa raporto pri UK mi skribis, ke Islando havas tre longan tagon kaj mallongan nokton en Somero. Similan fenomenon mi spertis ankaŭ en Lillo, Francujo. Dum la kongresaj tagoj la suno leviĝis meze je 6:00 kaj subiris meze je 21:36. Do, oni havis sufiĉe longan luman vesperon en somero en Lillo.

Unu el gravaj motivoj, kiuj igis min aliĝi al la 100a UK, krom ĝia 100a-eco, estis ekskurso al Bulonjo-ĉe-Maró, la urbo de la Unua Kongreso de Esperanto. Laŭ mi Bjalistoko, Varsovio kaj Bulonjo estas la tri vizitindaj lokoj por entuziasmaj esperantistoj. La ekskurso okazis la 29an de julio. Preskaŭ 300 esperantistoj veturis per ses aŭtobusoj tra la nordfranca ebenaĵo al la havenurbo Bulonjo-ĉe-Maró. Jen miaj hajkoj survoje:

hela frideco
flugas super grenkampo...
pajlorulaĵoj

sterniĝas lumo
jen sur vasta grenkampo...
verdaĵoj ombraj

nuboj someras...
kun multaj krokodiloj
nun al Bulonjo



La aŭtoro ĉe la 100a UK

Post du horoj da veturado la busoj atingis la apudmaran urbon. La suno brilis kaj mevoj gaje kriis. Ni piediris ĝis la teatro Monsigny, kie okazis la Unua Kongreso de Esperanto. Ekstere moderna, sed interne bone konservite klasika, la malgranda teatro akceptis nin

esperantistojn kun modesta kaj familia etoso.

Sur la teatra podio sidis Xavier Dewidehem, la prezidanto de LKK, Mark Fettes, la prezidanto de UEA, kaj Louis Christophe Zaleski-Zamenhof, la nepo de D-ro Zamenhof. Brian Moon, Akademiano, laŭtlegis la paroladon de L.L. Zamenhof eldiritan ĝuste en ĉi tiu loko antaŭ 110 jaroj. Estis tre kortuŝa momento por mi, kiu sidis en la sama teatro, kie kolektiĝis la unuaj kongresanoj, aŭskultante la saman tekston, kiun aŭskultis la unuaj kongresanoj.

Mark Fettes atentigis en sia parolado, ke la unua kongreso en Bulonjo-ĉe-Marŝo estis lulilo de parola uzado de Esperanto, en kiu multaj partoprenintoj unuafoje spertis per propraj gorĝoj kaj oreloj amasan vibradon de Esperanto.



Poste oni eliris el la teatro kaj parade marŝis kun flagoj kaj banderoloj tra urbaj stratoj ĝis la fervoja stacidomo, kie siatempe elvagoniĝis Zamenhof kaj aliaj kongresanoj.

post cent dek jaroj
marŝas esperantistoj...
ĝojkantas mevoj

Antaŭ la stacidomo staris busto de Zamenhof. Oni havis tie ceremonion por nova ŝildo ĉe la busto. Poste oni plu marŝis ĝis la urbodomo, kie la urbestro akceptis esperantistojn per ceremonia parolado kun vinoj kaj manĝetaĵoj. Sur la urboturo (belfrido) apud la urbodomo flirtis verda flago de Esperanto unuafoje en la urba historio.



Post la ceremoniaĵoj ni vizitis restoracion, kie ni povis ĝui bongustajn pladojn kaj abundan babiladon. Ni reiris al la malnova urbokvartalo, kiun ĉirkaŭas alta ŝtona remparo. Ni vidis malnovajn kastelon kaj bazilikon.



ŝtona remparo
staranta dum jarcentoj...
ventas el maro

En la kongreso mi renkontis du usonajn esperantistojn. Ili estas fratoj kaj miaj hajkamikoj. Dum la kongreso mi plurfoje parolis kun ili. Ankaŭ ili partoprenis en la ekskurso al Bulonjo kaj ni veturis per la sama buso. Dum mi observis, ili babiladis inter si nur en Esperanto dum la veturado. Tre laŭdinda konduto. Se japanaj esperantistoj estos en tia situacio, plimultaj el ili interparolos ne en Esperanto, sed ekuzos la japanan.

Tra la kongresaj tagoj mi pensadis pri la graveco de parola uzo de Esperanto en ĉiaj situacioj. Fojfoje mi aŭdas japanajn esperantistojn, kiuj insistas, ke oni uzu Esperanton kun alilandanoj sed uzu la japanan lingvon inter japanoj. Sed mi trovis, ke tia sinteno ja malhelpas al japanaj esperantistoj progresi en Esperanto-lernado. Parola uzado estas fundamento de lingvolernado. Ni, japanaj esperantistoj, devus rekonsideri niajn ĉiutagajn agadmanierojn en Esperantujo.

(Fino)

<要旨>

リールの第100回世界エスペラント大会に参加した理由のひとつは、第1回世界大会の開催地ブローニュ・シュル・メールへの1日遠足があること。ザメンホフが記念すべき演説をおこなった劇場の座席に座り、当時は想うことができたのは、感動的な体験だった。

電子機器とUK

石部 敦子 ISIBE Acuko (広島)

今回7回目のUK(世界エスペラント大会)に参加した。いろんな電子機器を持参したので、充電器とかを一杯持っていくこととなり、改めて時代の流れを感じた。ということで、UKと電子機器の関わりを考察してみました。

私が、初めてUKに参加したソウル(1994年)では、まだ携帯電話は普及しておらず、自動車電話が、出始めのころだったかと思う。当時FAXも家になかった。寮住まいであったので、その3年前に自室に電話がついたのが進歩だった。その後、留守番電話だけでは、内容のやり取りの不安を覚えてFAXを購入した。

私が携帯電話を所有することとなったのは、1997年であるから、その2年後のベルリンのUKでは、携帯電話を持って行ったが、海外で使用できる機種ではなかった(当時海外利用するためには、別に借りる必要があった)ため、電源OFFモードでUKでの友人との連絡は、ランデブータブ(rendevutablo)のみであった。パソコンもWindowsが普及してきたので、そのころ買い換えたが、海外に持参するには、パソコンが戦略兵器になるため、事前に手続きが必要であった。

私の携帯電話に海外利用モードが標準になったのは、ビヤリストック(2007年)からである。この時、ポーランドや乗り継ぎのオランダ等で電話やメールを送受信しとても便利になって喜んだものであるが、防災メールを多数受信して(地元で豪雨のため、災害が発生していた)、帰国後多額の料金を支払う羽目になるのであった。

今回は、携帯に合わせてタブレット、携帯Wifiルーター(手持ちの国内用と海外用をレンタルした)等々充電器、コンセント変換器(型の異なるコンセントに差し込むための器具)を多数持参することとなった。ビヤリストックの時は、デスクトップ・パソコンの所有になっていたの、持ち運びは困難であり、パソコンは自宅で留守番という事態になっていた。2年前の買い換えたときに、ノートに再度変更し、持ち出し可能となったが、重い荷物は願い下げということで、タブレットのみの

持参とした。

ところで、実際の通信状況であるが、携帯の電波から、次第に Wifi の通信への変化し自宅の通信もプロバイダーの有線から Wifi ルーターの無線に替えたところであるが、日本より通信状態がよくなった昨今、どこでも無料 Wifi が使用できるようになっている。

このため、海外では、携帯電話のデータ通信を OFF にして Wifi でのみの使用として通信料の低価格化を図っていた。

それで、実際の使用についてであるが、現在、ホテル、会場、レストラン等の施設で独自に Wifi が無料で使用できる。ただし、利用にはパスワードが必要で(尚且つ有効期限がある)その都度入力を必要とした。

今回の UK では、会場では、esperantolilo という名の Wifi で会場内での接続が無料で利用できた。パスワードは、kuriero (大会新聞)に載っており、初日からの利用が行えた。実際にタブレットで、facebook をしている人、プログラムや写真をすぐアップして、あらこの人、こんな人と写真を撮っていると人の行動が監視できたりもした。また、忘れ物を Line で連絡したりとか。しっかり利用している人がいる反面、「充電器を忘れた」、「通信の接続方法が不明」、「使用方法不明」等利用できていない人が多かった。部屋でのみメモリを利用していただけ、住所録を見ていたとかもつたいない使用方法を見てしまった。

ここで、一つ落ちだが、今回海外用携帯 Wifi ルーターをレンタルして出かけた。なんとこのルーター2日目にバッテリーが充電できなくなって使用不能に。ホテル、会場はパスワード使用タイプの Wifi で利用クリア。レストラン等の施設は、パスワードを一旦受信するタイプであるため、利用不可であった。

さて、UK だが、開催地のリールは、世界遺産のある北フランスの都市で、大勢の観光客が訪れていた。しかしながら、日本人はほとんど見かけず、観光地に日本語の案内は皆無だった。これは、遠足で行った他の都市でも一緒である。観光地の外国語ガイドは、良くて英語、蘭語、独語(アジア関係の言語はなし)。また、フランスの広い国土を示すかのように第1次世界大戦の跡地に野戦場をそのままの形で残し、観光地化していた。ついでに炭鉱を改造した地下通路(よく地下に潜るといいますよね)もそのままに観光客に見せるという荒業である。そして、第1次大戦で参戦してドイツを追い払ったカナダのために、広大な土地に

その時に亡くなった兵士のための慰霊碑を建て公園としていた(なんとこの慰霊碑は、カナダのパスポートに載っている)。イギリスから来たおばあさんが(未だあまりしゃべれなかった)、熱心に見学をしていた。

どこの跡地でもドイツ人が多く訪れており、ドイツがどうしたとの説明に耳を傾けていた。

半日遠足で行ったビール工場(フランスなのにビールです)では、UK の始まった年にできた工場で、今回の大会ビールを作って販売している工場だった。仕事柄楽しく見させてもらった。ついでにお土産に1本もらった。

時系列的に整理

(携帯電話や iPad 等の発売流通等を比較すると分り易いかも)

年	UK	所持機器	持参機器
1994 (H6)	ソウル (韓国)	PC (Windows 以前)	なし
1997 (H9)	アデレード (オーストラリア)	なし (9月から携帯電話を所有)	なし
1999 (H11)	ベルリン (ドイツ)	PC (Windows 98) 携帯電話	携帯電話 (電源 OFF)
2003 (H15)	ゴッテンブルグ (ヨーテボリ) (スウェーデン)	PC (Windows 98) 携帯電話	携帯電話 (電源 OFF)
2007 (H19)	横浜 (日本)	PC (Windows XP) 携帯電話	携帯電話 (通常仕様)
2009 (H21)	ビヤリストック (ポーランド)	PC (Windows XP) 携帯電話	携帯電話 (海外仕様)
2015 (H27)	リール (フランス)	PC (Windows 7) スマートフォン タブレット Wifi ルーター (国内用)	スマートフォン タブレット Wifi ルーター (国内用) Wifi ルーター (海外用レンタル)

最後に旅行社の海外旅行の説明に、海外の電力は 100V でないため、変圧器(4000 円ぐらいし、なおかなり重い)が必要と書いてある。ところが、実際には、海外から購入する人にも対応するため、ほとんどの家電（特に電子機器）については、100～240V の使用可となっているため、注意事項としては、逆に「**変圧器を使用しないこと!**」の記載がある。旅行業界の常識は、今や非常識なのである。

(終)

電子機器いろいろ (編集子)



Tekokomputilo
(ノートパソコン)



Poŝtelefono
(携帯電話)



Saĝtelefono
(スマートフォン)



Tabulkomputilo
(タブレット)

En kiuj programeroj mi ĉeestis en Lilla UK?

Tahira Masako (Kioto)

En UK okazas 200-300 programeroj. Mi deziras ĉeesti en ĉiuj programeroj, sed kompreneble tute maleblas, ĉar samtempe okazas pluraj programeroj sen tagmanĝtempo. Ĉi-foje eĉ kvar kongresejoj funkciis. Mi povis ĉeesti nur en la ĉefkongresejo por ŝpari tempon viziti aliajn kongresejojn. Krom la programo ĉiutage okazas tuttagaj ekskursoj kaj duontagaj ekskursoj. Ĉi-foje 20 tuttagaj kaj 14 duontagaj ekskursoj. Mi ne tagmanĝas, nenien ekskursas, ĉar por mi gravas kongresi kaj ŝpari tempon kaj monon. Sed ĉi-jare mi ne povis rezigni tuttagan ekskurson al Bulonjo-ĉe-Marco en merkredo, kiam nenia programo okazis en la kongresejoj. Pri la UK (kun 2698 aliĝintoj el 80 landoj) aliaj pli interese raportos. Tial mi mallonge skribos en kiuj programeroj mi partoprenis.

7/25 (sabato)

1. Komitato de UEA 1 (kiel observanto, ĉar mi jam ne estas komitatano de UEA)
2. Koncertoj: Konga Espero (Victor Lufimpu); Gijom' Armide
3. Movada Foiro (kiel kunlaboranto, sed ĉe la budo de JEI ne mankis deĵorantoj, tial ĉe Komisiono de UEA pri Azia Esperanto-Movado kaj ĉe Sennacieca Asocio Tutmonda)

7/26 (dimanĉo)

1. Solena Inaŭguro
2. Dancateliero Kapriol'
3. Estraro de UEA respondas
4. Dancospektaklo-HAFU-Duobla kulturo: Francio kaj Japanio (iam ĉe mi gastinta Flavie Audibert moderne dancis)
5. Nacia Vespero

7/27 (lundo)

1. Simpozio: Unesko 70-jara
2. Kongresa Temo 2: Artoj en la dialogo inter kulturoj
3. Kleriga Lundo: Kiel pardonpeti en Esperantujo
4. Kleriga Lundo: La arto publike paroli
5. IKU (Internacia Kongresa Universitato) 4: La Budhisma Kosmo (Bill M. Mak bonege prelegis)
6. Metiejo de edukado.net
7. Kongresa Balo Kapriol'

7/28 (mardo)

1. Komitata Forumo-Kunordigo
2. KAEM-Azia Agado
3. Afrika Komisiono
4. Amerika Komisiono
5. Verduloj
6. Komitata Forumo-Kapabligo
7. Teatro: Feliĉas ĉiuj

7/29 (merkredo)

1. Tuttaga Ekskurso: Bulonjo-ĉe-Mar--Ceremonio memore al la 1-a UK

7/30 (ĵaŭdo)

1. Kongresa Temo 4: Podia diskuto de denaskaj esperantistoj
2. Delegita Reto
3. Libro de la Jaro
4. IKU 7: Min trafis feliĉ' esti rusa poeto... rusoj en la Esperanta poezio (Mikaelo Bronŝtein)
5. Centra Oficejo respondas
6. Kolekto por Planlingvoj kaj Esperantomuzeo
7. ATEO (Ateista Tutmonda Esperantista Organizo)
8. Koncerto: Martin kaj la talpoj
9. Koncertoj: JoMo; Sepa kaj Asorti

7/31 (vendredo)

1. Komitato de UEA 2
2. Aŭtora Duonhoru (pri la libroj de Hori Jasuo kaj Yamakawa Setsuko)
3. SAT (Sennacieca Asocio Tutmonda)
4. Japana Konstitucio, artikolo 9-diskuto pri mondopaco
5. Legantoj de "Esperanto"
6. MONA (Mez-Orienta Nord-Afrika Komisiono)
7. Oratora Konkurso (kiel unu el la ĵurianoj)
8. Venontaj UK-oj (pri Nitra UK 2016 kaj Seula UK 2017)
9. Aŭkcio
10. Internacia Arta Vespero

8/01 (sabato)

1. Ferma Soleno
2. Libroservo 7

Apenaŭ sesonon el la tuta programo mi povis ĝui. Iujn nur partojn pro la manko de tempo. Strangis, ke preskaŭ nenie troviĝis japanoj, kiuj havis la trian lokon pri la multnombreco de la aliĝintoj post francoj kaj germanoj. Ĉu mia kongresumemo malsanas?

(Fino)

<要旨>

4 か所の会場で 250 以上あった番組の全部に参加したいが、同時並行番組が殆どで、昼食や会場外の全日遠足 (20) や半日遠足 (14) をサボってもやっと 6 分の 1 しか参加できず残念。大会場にへばりつきたい私は病気か。

エスペラントと機械翻訳

長瀬 久明 (兵庫)

エスペラントは易しく学べます。いっぽう、機械翻訳は母語で交流出来ます。とくに Google 翻訳は 2015 年現在 90 言語を翻訳でき、ネット人口の 9 割以上をカバーしています。しかし誤訳されたときへの対策が必要です。そこで補助語を思い付きました。次の例文を見てください。

鯛が好きです。 → 鯛 (補助語=魚) が好きです。

もし「鯛」が誤訳されると、何が好きか、全然、分かりませんね。でも、魚という補助語が正しく翻訳されていれば、魚の一種が好きなのだと分かります。(両方とも誤訳されたら、やはり、分かりませんが。)つまり「ソフト一任ではなく、受信者・発信者も工夫しよう」という訳です。さらに、母語で発信するだけです。外国語のメールでも Web ページでも、受信者が自分の母語に翻訳します。

実際の方法を次の、「私は烏賊が好きです。鯛も好きです。」という2つの文で説明します。「鯛」に「魚」という補助語を付けるには、Html (エッチ、ティー、エム、エル) というネットの言語で次のように書きます。

私は烏賊が好きです。鯛も好きです。

この文をインターネットのブラウザで見ると、「私は烏賊が好きです。鯛も好きです。」と表示され、<><>とその中は表示されません。しかし、マウスが「鯛」の文字の上にあるときは、小さい別枠が現れ、その中に「魚」と表示されます。これは、ちょっとした説明に使う機能です。知っている方もいるのではと思います。

次に、これを Google 翻訳しましょう。Google 翻訳を使うには、まず、この文を Web ページにしてネットに公開します。次に、Google 翻訳のサイトへ行き、原文を入力する枠に、公開した URL (ネットアドレス)

を入力します。すると、次のように翻訳されます。次の右側が、上の2文を英語とエスペラントに翻訳した結果です。

日本語	英語
私は烏賊が好きです。 鯛も好きです。 ↕ 魚	I like squid. Thailand is also like. ↕ fish

日本語	エスペラント
私は烏賊が好きです。 鯛も好きです。 ↕ 魚	Mi ŝatas kalmarojn. Tajlando estas ankaŭ ŝatas. ↕ Fiŝoj

烏賊は、正しく翻訳されているようですが、鯛は、東南アジアの「タイ王国」に誤訳されています。これでは混乱し、全く理解できません。ところが、マウスを Thailand、Tajlando に置きますと、fish、Fiŝoj と表示されます。これにより、日本語を全く知らない人でも、元の単語「鯛」は魚の一種で「タイ王国」は誤訳だ、と理解できます。つまり、文と補助語は別々に機械翻訳されるのです。

こんな一寸した工夫でも意思疎通に役立つと思い、あと2つ考えました。主語、述語、といった構文を色で明示すること、文と文の間に、出来るだけ、接続詞を使うこと、です。以上の3つを実験し、一年ほど前に、「電子情報通信学会技術研究報告」へ「Web 読者の協力を促して伝達度の改善を目指す訳文への補助情報について」と題して発表しました。もし、私もやってみようと思う方がおられたら、ご連絡をお待ちしています。(メールアドレス hisac@hyogo-u.ac.jp)

(終)

例文「私は烏賊が好きです。鯛も好きです。」を次のアドレスに置きました。本記事の内容を確認できます。(編集子)

<http://esperanto.jp/LH/242.html>

OAZOのこと

石坂 元 (千葉)

20年程前のことです。東京駅前再開発プロジェクトのひとつとして、旧国鉄本社とその周辺を再開発し、商業地区を建設する計画がスタートしました。その頃、新しい商業施設のネーミングについて、勤務先の会社内で名前の公募が行われました。平成8年頃だと思いますが、簡単な応募様式が配られ、ネーミングのコンセプトに「都会のオアシス」をイメージできるような名前、ということで、ふと頭に浮かんだのが「オアシスならばエスペラントでOAZO」ということで、数秒で書き込んで提出致しました。「OAZOはエスペラント語でオアシスの意味」とだけ書いたと思います。

実はその後商業地区が宛成するまで公募があったことさえ、すっかり忘れておりました。その後の社内異動や転勤で各地を単身赴任で転居しておりましたが、5年程前に久しぶりの東京勤務に戻り、ある日その商業地区に立ち寄り何気なく見上げたロゴに「OAZO」とあり、これはもしかしたらとパンフを手にとって見ると「オアゾ (OAZO)」それはエ

スペラント語で「憩の地 (オアシス)」を意味する言葉、と書いてあったのです。「これは自分が応募したものだ」とそれで確信した訳ですが、今となっては自分が応募したものであることを証明できるものも、知っている人も誰もおりません。ただ、自分だけが「名づけの親」と思っている次第です。もし、このパンフレットを見て、エスペラント語に興味を持っていただける人がいるならば幸いなことだと思います。

(終)

OAZOは東京駅の丸の内側に2004年(平成16年)にオープンしました。このOAZOを見てエスペラントのことを知り、エスペラントを学習し始められた人が実際におられます。(編集子)



広島RH同窓会

福井 政春 (岡山)

8月22日(土)に広島RHの同窓会を行いました。エスペラントにかかわった年代やかかわった時間はそれぞれですが、久しぶりに集まることにしました。集まったのは南は長崎から北は埼玉まで33人でした。また、入会年も1968年から1988年まで様々でした。近況報告やkanto等で2時間半の懐かしい会合はあっという間に終わってしまいました。この集まりを期にエスペラントにまた接してみようという人もいたようです。参加したくても日程が合わなかった人や、連絡がつかなかった人もいて、来年もう一度集まることにしました。



La Harmonio 242号 2015年10月3日発行
編集発行 Rondo Harmonia(国際語教育協議会)

*組織委員会書記局・La Harmonio 編集部・財務担当
〒618-0071 京都府大山崎町大山崎尻江 13-8 森川和徳
FAX 075-955-1627 電子メール kz_morikawa@yahoo.co.jp

*ウェブサイト <http://esperanto.jp> 電子メール officejo@esperanto.jp

*RH会費 2016年度以降(2-3頁参照)
維持会費 600円
維持会費+家族会費(ご夫婦でRH会員の場合) 900円

*会費払込先 郵便振替口座 01050-3-11902 加入者名「国際語教育協議会」
または 楽天銀行 マーチ支店 普通預金 3302340 「森川和徳」